Doris Lessing研究

個人と社会——逃避と没入

大　野　佳代子

はじめに

第二次大戦後の英文壇に於て、もっとも注目に値する女流作家のうちの一人と言われるDoris Lessing。彼女は1950年発表の処女作 *The Grass is Singing*以来、殆ど2年に1作の割で長編小説を発表し、その他にも数多くの短篇小説・詩・戯曲・随筆等を著している、きわめて多産な作家である。Mona Knappは、Lessing の作品は3つのグループ（彼女はphase という語を用いている）に大別することができるとし、*The Golden Notebook*を その第一のターニング・ポイントと位置づけている。[1] 1962年に発表された同書は、当時漸く高まりつつあったフェミニズムの機運と相俟って、その信奉者たちに競って読まれたと言われるが、彼女の代表作であるのみならず、今世紀最大の傑作の一つとの評価が定着しているこの作品に、果たしてフェミニストたちの指標となり得る概念が含まれていたであろうか。

本稿では、ともに一人の女の精神崩壊の過程を描いた作品*The Grass is Singing*と、*The Golden Notebook*を手がかりに、〈個と社会のかかわり〉に対するLessingの見方について、考えてみることとしたい。

1．

Lessing は5才の時から30才で渡英するまでの、およそ人生でもっとも多感な25年間を、南ローデシアで過ごしている。[2] 彼女の父親が、当時英国政府が募っていたアフリカ開拓団の一員として移住したためであったが、そこでの一家の生活はごく悲惨なものであったという。おそらく*The Grass is Singing*中のDickの生活ぶりがそれを代弁しているのではあるまいか。苛酷な自然との闘い、徒労の連続でしかない毎日、ボロ雑巾のように疲弊した肉体、粗末な食事、トタン板一枚きりの屋根、剝き出しの壁、ガランとした部屋……。あまりにも重く、暗く澱んだようなDickの生活描写は、息詰まる程のリアリティを感じさせ、圧倒的である。この、白人でありながら黒人にも劣る程の、夢も希望も全くないような極貧の生活の中で、Lessing は母親を通して、伝統的な女性観に対する嫌悪の情を強めていったといわれる。「社会的に是認される役割に対して制限を設けられる、或は、己れをとりまくより大きな政治的状況に対して盲目であるよう仕向けられる、というような形で人間性を奪われ欺かれ続けてきた」[3] 女性が、自らを縛る因襲的な女性観の故に、一種のアリ地獄の中に落ち込んでゆく姿を描いているのが*The Grass is Singing*である。

およそ25万語から成る大作*The Golden Notebook*と対比的にみる時、*The Grass is Singing*にみられる、冷徹に事実だけを語り進めてゆく筆致の持つ冷淡さは、平板で単調なものとの印象を与えるかもしれない。が一方で、その単調さの故に、そこから生じる力強さとスピード感は一段と精彩を放つように感じられる。11の章から成るこの小説は、女主人公であるMary Turnerが刺殺体で発見され、犯人として黒人のハウス・ボーイが逮補されたことを報じる新聞記事で始まる。そしてその事件に対する人々の反応が紹介され、更に特定の個人—CharlieとTonyの反応が描出されるに及んで、Mary という殺さ

れた女性に対する読者の関心は、いやが上にもかき立てられる。次に引用するのはTony の反応である。"It's not something that can be said in black and white, straight off." (*GS*, p.24)[4] この極めて暗示的と思われるTonyの呟きにより、読者は事件の全貌を一刻も早く自分の眼で確かめたいという、殆ど性急な衝動に駆られることになる。Tonyは自分が知り合って間もなかった、生前のMaryがどんな人間だったのかを考える。"What sort of woman had Mary Turner been, before she came to this farm and had been driven slowly off balance by heat and loneliness and poverty?" (*GS*, p.29) このように、第1章の終わり近くでTonyが自問する言葉によって、この物語が、Mary という女性が孤独と貧苦とアフリカの暑熱の中で、精神を崩壊させていく過程を辿ったものであることを、読者は知らされるのである。

第2章では、ほんの5ページ足らずの間に、生い立ち・育った家庭環境等、30才の誕生日を迎えるまでの彼女の歴史が、簡潔かつ明快な文体で、スピーディに語られてゆく。Mary の育った家庭は、Lessing 自身のと同様、貧しく陰うつな家庭であった。不甲斐ない飲んだくれの父親をなじり、愚痴ばかりこぼす母親を疎ましく思いながらも、母親に同調してしまうMary。父親と母親の間の絶え間ない争いを通して、彼女の心は父親に対して閉ざされていく。彼女は母親からフェミニズムを受け継ぐが、それは謂わば建て前だけの、全く形骸的なものであった。愚痴っぽく嘆く母親の姿は、一般に女性が置かれている社会的立場をMaryに思い知らせたが、母親は現状に対する不満を募らせるばかりで、謂わゆるフェミニストらしい行動を取ることはなかった。Lessingが、Maryに受け継がれた意識を"an arid feminism"(*GS*, p.36) と形容したのは、それが行動を伴わない、概念だけのものであった故である。更に一歩進めて言えば、その概念すらもMary の場合は、謂わばフェミニストにとってはマイナスとも言える性質のものであった。というのは、彼女はフェミニズムの前提たり得る、女性の置かれている立場に対する現状認識はしていたが、それを変革すべきものとはみなさなかったからである。否むしろ、彼女の心の奥底に潜んでいたのは、〈常に男性の支配下に置かれる、忍従的な女性〉という立場に、我が身を置いておきたいとする願望ではなかったか。父親に対する彼女の心が、そのことを証している。両親の不和を見る彼女の眼に、父親はただ母親を苦しめるだけの存在と映る。"It had never occurred to her that her father, too, might have suffered." *(GS*, p.36*)*

彼女は一方的に父親にのみ非があると考えているが、その基盤となっているのは、男性が社会を支配しているという現状及び、男性にのみ自由に行動する権利があり、女性は自らの意志で行動することを封じられた、従属的立場に位置するものであるという伝統的な"sex roles"に対する容認である。先の引用文に続く次の文は、彼女がこのような"sex roles"観に拘束されていることを示すものである。"'About what?' she would have retorted, had anyone suggested it. 'He's a man, isn't he? He can do as he likes'" (*GS*, p.36) この、〈父親は男だから、何だって好きなことができるじゃないか。父親には同情する余地など全くない〉とするMaryの考えは、裏返してみれば、自己弁護である。即ち、女である自分を男性に対して従属的な立場に置いておくことによって、一身を挺して現実（人的社会及び自然の両方を含む）と闘うことから免れようとする、自己保身を願う本能から出たものである。虐げられた女性という現実は認識していても、女に対する因襲的偏見を楯に、むしろ自分を厳しい過酷な現実から遠ざけておこうとするMary。彼女は常に、静かな無風状態の中に自分を留めておきたいと願う。父母が相次いで死に、彼女の置かれた環境が変わると共に、彼女は、"the comfortable carefree existence of a single woman in South Africa" (*GS*, p.36)として、自立した快適な生活を送ることができるようになったが、彼女のフェミニズムは相変わらず「不毛」のままで、決してアクティヴなものにはならなかった。

彼女は天涯孤独の身となった自分が、いかに

経済的に恵まれた生活をしているかを、全然自覚していない。もしこの自覚が少しでも彼女にあったなら、彼女のその後の人生は、あれほど悲惨なものにはならなかったろう。彼女は因襲的な女性観に我が身を縛りつけている女で、しかも先述したように、それをむしろ口実にして、現実から逃避したいという潜在願望を持っている。この、Maryの〈現実からの逃避願望〉は、さまざまな形をとって現れる。以下に引用する文は、その具体例である。

①She chose to live in a girl's club, which had been started, really, to help women who could not earn much money, but she had been there so long no one thought of asking her to leave. She chose it because it reminded her of school, and she had hated leaving school. (*GS*, p. 38)

暗く不幸だった彼女の子供時代の中で、ただひとつ寄宿舎で過ごした時だけが、真に幸せな時期であった。寄宿舎時代を懐かしみ、そのためにいつまでもガールズ・クラブに居続けたいと願う彼女の心には、それよりもはるかに恵まれているはずの、現在に対する認識は少しもない。

②She seemed impersonal, above the little worries. The stiffness of her manner, her shyness, protected her from many spites and jealousies. … she felt disinclined, almost repelled, by the thought of intimacies and scenes and contacts. She moved among all those young women with a faint aloofness that said as clear as words : I will not be drawn in. And she was quite unconscious of it. (*GS*, p.38)

これも、集団と深くかかわりを持つことを避け、己れを集団から遊離させておくことを、むしろ好む、Maryの一種の〈現実拒否〉の姿勢を示すものである。

③she still wore her hair little-girl fashion on her shoulders, and wore little-girl frocks in pastel colours, … (*GS*, p.40)

ここに描かれた、彼女の髪型と服装に対する好みは、おそらく彼女の〈現実逃避願望〉を最も直截に示すものであろう。30才を過ぎてなお、彼女がこのように子供っぽい髪型と服装を好むのは、自分をいつまでも周囲の眼に子供として映るようにしておきたいと願う、彼女の無意識の表れである。子供というものは、社会的に最も気楽で無責任な立場に置かれている。どこで何をしていようと、どんなことを考えようと、さほど目くじらを立てて干渉するような大人はいない。そしてまた、男性に対しても、性の対象として見られることはないのだから、緊張したり、恐れたりする必要はない。つまり、彼女は子供っぽい服装や髪型によって己れを子供と同化させ、更にそうすることによって自分を周囲とのかかわりに於て、非現実的な存在にしようとしたのである。

④第5章で、Dickとの結婚後、日中一人で家で留守番しているMaryが、次から次へと自分の熱中できる対象物を探し出して、てきぱきと処理していく姿が、数ページに亙って描かれるが、これもMaryの〈現実逃避〉の一形態である。結婚した時に持参した花柄の布でクッションカバーとカーテンを作り、殺風景だった部屋は華やかな色彩で彩られる。物の配置換えをし、ありとあらゆるものに刺繍を施し、壁は汚れを洗い落とし真っ白に塗り直される。これらのことを次々に手際よく仕上げていくMaryの姿は、いかにも有能な印象を与える。Dickは、このような予期しなかったMaryの一面を知って、少なからず自信喪失に陥る。自分に欠けている“energy and efficiency”(*GS*,p.65)を彼女が備えていると思ったからであった。しかし事実は、彼女は有能でも何でもないのである。彼女は何もしないでいるのが怖かったにすぎない。自分がDickのような極貧の男と結婚してしまったという〈現実〉を直視しないで済ませるためには、常に何かに熱中していなければならなかったのだ。現実から逃避するためにMary が取った行動を誤解し、その結果DickがMaryに 対して抱いた劣等意識は、逆にMaryのDickに 対する意識に反映され、後に世間との交わりを殆ど絶ち黒人のハウス・ボーイとDick，Mary の3人だけの生活が始まるに及んで、Maryの精神錯乱を助長することになる。

こうして、年令的にも経済的にも十分に自立した立派な一個の人間であるにもかかわらず、

そのような己れの現実に目を閉ざし続けたMaryの、この奇妙に現実から遊離した意識のバランスは、皮肉にも彼女が「自分の住んでいる社会がどんな仕組みのものか、人間が集団になった時には、どんなことがしばしば起こるか、というようなことについて多少なりとも知っている者」(*GS*, p.43) ではなかったために、崩され、運命的としか言いようのないDickとの結婚に至るのである。

Mary の男性に対する感覚はきわめて複雑である。①男性の女性に対する支配性を容認する一方で、②男性に対する軽蔑意識を潜在的に持ち、かつ③生理的・本能的に、男性に対して嫌悪と恐怖の情を抱いている、という具合である。この複雑な男性に対する感情に、更にカラー・バーに対する意識が重なって、Maryの精神崩壊は急速にその度を進めることになるのであるが、Dickとの結婚はその最初の楔となった。女性に対する男性の優越性を是認している彼女にとって、無能な男ほど軽蔑に値する者はなかった。病に仆れたDickに代って農場の監督をする破目になったMaryは、多勢の男を思いのままに動かすという初めての経験をすると共に、Dickの無能さを思い知らされる。

> The sensation of being boss over perhaps eighty black workers gave her new confidence; it was a good feeling, keeping them under her will, making them do as she wanted. (*GS*, p.119)
>
> Her attitude towards Dick, always contemptuous, was now bitter and angry. It was not a question of bad luck, it was simply incompetence. (*GS*, pp. 123-124)

もしこの時点で二人が、〈女は中、男は外〉という "sex roles" 観を捨てていたら、Mary の精神錯乱はくいとめられたかもしれぬ。少なくとも彼女が農場経営にタッチすれば、その「偽りの」エネルギーと有能さでもって、多少の成功は期待できたであろうから。経済的余裕は、精神的余裕をも同時にもたらすものである。しかし、Dickの病気が治り、Maryは再び家の中にこもった生活を送ることになる。やがて、かつてMaryが鞭で打った黒人Mosesがハウス・ボーイとして家の中で使われることになる。Mosesに対するMaryの意識は、彼女のもつ男性観のすべてを集約したものである。「自分よりすぐれた能力を持つ男を求める」(*GS*, p.135) 彼女は、輝く褐色の肌を持ち、筋肉隆々とした素晴らしい肉体を持つMosesに対し、彼女の上に君臨し彼女を支配する権利を是認すると同時に白人である彼女に臣下として従順にひれ伏すことを要求する、という全く矛盾した意識を持つ。もしMosesがDickのように、無能で無気力な男であったなら、彼女の分裂は生じなかったであろう。またもし、Mosesが白人であったなら、彼女は己れを従的立場に置くことに満足しきったことであろう。Dickの無能さに対する彼女の憎しみは、同時に自分自身に対する憎しみともなった。(*GS*, p.135) Mosesが黒人で、しかも彼女より強い人間であったことは、既に、Dickの無能さに起因する貧苦に対する絶望と、耐えがたい酷暑と、同じくDickの無能さに起因する自己嫌悪とで、ガタガタになっていたMary の精神のバランスを、一挙に突き崩すこととなった。日中Mosesと二人きりでいる家の中の描写は、Mary にとってのみならず、読者にもまさに地獄図と映る。

今までみてきたように、*The Grass is Singing* は、あまりにも自分の置かれている現実に対する認識・自覚が欠けていたために、なす術もなく無惨に精神を崩壊させていった、一人の女の姿を、ルポルタージュ風に記録していったものである。Maryの身に起こった数々の不運や不幸、そしてその究極に生じたハウス・ボーイに刺し殺されるという悲劇——これらはすべて、彼女の〈無自覚〉に起因するものである。彼女がもっと〈現実〉をみつめていたなら、せめて何か一つのことにでも、それに執着するほどの自覚を持っていたなら、彼女の人生は全く変わっていたであろう。読んでいて、思わず歯痒さ・じれったさを覚えさせるような場面が随所に出てくる。Maryが精神のバランスを立て直すことのできそうな機会は幾度も現れたのであるが、その都度、彼女はますます悪い方向へ進む選択を採ってしまうのである。

2.

*The Golden Notebook*は、Maryとは全く対照的に非常に強い自意識を持った女性、Anna を主人公とした、謂わば〈自覚しすぎた〉女の精神の崩壊を辿った記録であるといえる。流れるようなスピーディな時の展開と、簡潔で歯切れのよいリズム感にみちた文体とを持った *The Grass is Singing*に比べると、*The Golden Notebook*では時の流れが如何にも遅く感じられる。しかしその分、意識のひだに迫っており、ずっしりと重い読みごたえを感じさせる。

Annaは小説家であるが、目下長いスランプ状態に陥っており、過去に一度だけ発表した大ベストセラー*Frontiers of War*の印税で、娘と二人の生計を立てている。彼女の小説観は、"Literature is analysis after the event." (*GN*, p.196) というものであったが、現代社会はあまりにも広がりすぎ、目まぐるしく変化しすぎている。その中で、起こった出来事を正しく捉え分析するのは、至難のことである。Anna は小説の果たす機能は変わってきているのではないかと思っている。小説はかつては、作家が自分の人生観を表明する場であったのだが、今やそれは、ジャーナリズムの最先端に引き据えられその一翼を担わされていると、Annaは考える。

> we read novels for information about areas of life we don't know—Nigeria, South Africa, the American army, a coal-mining village, coteries in Chelsea, etc. *We read to find out what is going on.* … The novel has become a function of the fragmented society, the fragmented consciousness. (*GN*, p.59)

スランプにあるとはいえ、現代の小説家たるAnnaは、世の中に起こっていること、自分の中に起こっていること、その他ありとあらゆる〈現実〉を4種類のノートに書き留めていく。その内容については、Annaの言葉を引用するとしよう。

> a black notebook, which is to do with Anna Wulf the writer; a red notebook, concerned with politics; a yellow notebook, in which I make stories out of my experience; and a blue notebook which tries to be a diary. (*GN*, p.406)

Lessingはこれについて次のように言及している。"she has to separate things off from each other, out of fear of chaos, of formlessness — of breakdown." [6] つまり、Annaは自衛手段として4種類のノートを作ったのである。文明が進むにつれてますます社会は細分化していく。それと共に人間も互いに分断され、連帯性を失っていくことになる。Annaは〈現実逃避願望〉に侵されていたMaryとは全く対照的に、常に社会とのかかわりを保とうとする。現実の中に身を投じ、社会を少しでもより良い方向へ変えようと、積極的に行動する。"At least they believe in something."(*GN*, p.202) という理由でコミュニストになった彼女の赤色ノートには、党に対する批判が書き連ねられ、日記として書かれた青色ノートの、1950年3月から1954年3月までの部分は、すべて世界各地の戦争と死に関連した新聞記事の切り抜きで埋められている。これらは、単に身の回りだけでなく、より大きな社会にも常に注意を向け、絶えず集団の中の個としての己れのとるべき姿を自覚しているAnnaの、不断の努力を示すものである。

彼女は、世間が自分のことを"free woman"とみなすことに反発を感じている。世間の言う"free"とは、単に男性との関係に於てのみ下された定義であって、それはAnnaが自認している彼女の実像にはあてはまらないのである。彼女は、対男性関係に於てというような、そんな狭い定まった枠ではなく、もっと広い分野で、一定の枠にとらわれない、真に〈自由な〉人間でありたいと願っている。コミュニストでありながら党の路線に同調できず揺れ続けるAnna の心は、その〈自由志向〉を端的にものがたるものである。常に自由でありたいとする彼女が立ち向かわなければならぬのは、一定の枠や型にはまった考え方・行動を強要してくる〈集団〉である。赤色ノートに綴られた1950年以降1957年までの党との関係は、この〈集団と個〉の関係に於けるAnna の闘いの記録であるといえる。一個の人間としては、"better, truer vision"を社会に追求していくという姿勢を崩さないが、

特定の“ism”を信奉し、集団の一員として、敷かれたレールの上を走らされることには、拒絶反応を示すという、謂わば〈集団対個人〉という関係の中にあって悩める現代人——それがAnnaである。

*The Golden Notebook*の時間設定は50年代である。“something like ten years after World War II, the world would be communist and perfect.”[7]とLessingが自らを回顧して言うように、50年代というのは、多くの進歩的知識人たちが大戦後の世界に於て、新たな理想社会の実現を目指し、期待に胸躍らせて党に加入、やがて失望して党を去るという時代であった。Lessing自身もソヴィエト共産党内のスターリン主義者の残虐非道ぶりと、ハンガリー侵略に抗義して56年に離党している。*The Golden Notebook*に描かれた悩むAnnaの姿は、50年代に生きた知識人たちの苦悩を象徴するものである。否、50年代の知識人のみではない。キューバ危機・ベトナム戦争・中東紛争等々、辛うじてバランスを保っているかにみえるが、その実一触即発の危険性をますます高めている東西両陣営の、冷たく熱い関係。こうした緊張と不安の社会に身を置かざるを得ない、50年代以降のどの年代の人間にとっても、Annaは決して遠い存在ではない。己れの信念に忠実であろうとすればするほど、社会という大きな集団の中にあって、いよいよ深いジレンマに陥らざるを得なくなっていく社会的状況が続く限り、Annaは誠実に生きようとする人間にとって、ごく近い隣人であり、M. V. Libbyの言う[8]ように良き「仲間」なのである。

あまりにも雑多で、変化し続ける現実社会の中で、集団に呑まれまい、心の自由を失うまいとするAnnaは、混沌を避ける為に、自分を含む現実社会の動きを4つに分類整理して綴ったのであったが、彼女の恐れていた“breakdown”は思いがけない所から亀裂を発した。現実社会から逃避するどころか、積極的にそれとかかわりを持とうとしていたAnnaは、自分と社会を結ぶ唯一の表現手段である〈言葉〉に不信感を抱くようになったのである。言葉が突然その意味を失ったことに、Annaは或る集まりで他のコミュニストたちと議論していた最中に気付く。言葉はまるで外国語のように感じられ、話し手の口から飛び出した言葉と、本来話し手が意図していたこととの間には、大きな隔てがあるように思われた。(*GN*, p.258) 彼女の言葉に対する不信感はこの時から始まり、言葉の持つ重要性を十分認識している作家であるが故に、その不信は一層強くなっていく。次に引用するのは、Annaの言葉に対する喪失感を描いたものである

> now I read those entries and feel nothing. I am increasingly afflicted by vertigo where words mean nothing. Words mean nothing. They have become, *when I think,* not the form into which experience is shaped, but a series of meaningless sounds, like nursery talk, and away to one side of experience. Or like the sound track of a film that has slipped its connection with the film. *when I am thinking* I have only to write a phrase like “I walked down the street.”… (*GN*, p.407)

このAnnaの言葉に対する不信感は、やがて〈時〉に対する感覚の喪失へと発展する。現実と非現実とが錯綜し、毎夜夢を見るようになる。*Free Women3*では、このようなAnnaの心の不均衡—募ってゆく狂気・不安・恐怖——が、常態のAnnaと模様を織りなすようにして描かれてゆく。

ここに至ってLessing が描こうとしているのは、もはや〈集団対個人〉という相克をはるかに超えたもののようである。唯一“normal”な世界とのパイプ役であった娘のJanet が去った後、Annaは“the necessity of understanding the world”(*GN*, p.556)のために、新聞の切り抜きを部屋中にはりつけるが、これは、その中に身を置くことによって、失いつつある自己を再び集団の中にしっかり位置づけようとする、Annaの試みを表すものだ。しかし、以前はその中に自己の存在をくみ入れて秩序立てることができた新聞記事が、今では皆バラバラになって一斉に自分を襲ってくるような錯覚にとらわれる。世界と自分とが分断されてしまったこと、自分の意識は全部己れの内部にのみ向けられていることを、彼女は感じる。Annaがよくやるゲーム——それは“smallness”と“vastness”をは

てしなく対比させ、それを意識化していくというものである(*GN*, p.469)——は、Annaの関心が〈超現実〉へと向かいつつあることを示すものである。

言葉への不信に端を発し、Annaの関心が〈集団と個〉から〈個の内奥(無意識)〉へと向けられていったことを、上に述べたが、彼女が早くからその傾向を持っていたことは、4つのノートのうちの1つ、黄色ノートに明らかである。その中で彼女はEllaを主人公とした、*The Shadow of the Third* と題するストーリーを練っている。次に示すのはAnnaがEllaを分析してみせたものであるが、これによれば、"Third"とはEllaの愛人であるPaulの妻をさすのであるが、究極的にはElla自身を表しているのだという。"'the third,' previously Pau'ls wife ; then Ella's younger alter ego formed from fantasies about Paul's wife; then the memory of Paul; becomes Ella herself." (*GN*, pp.384－385) Paul への愛が深まるにつれ、そのまだ見ぬ妻に嫉妬し、軽蔑していたはずの妻の座に憧れ、遂には結婚という形式に執着するようになるElla。以下の引用は、この間のEllaの意識の変移に対するAnnaの覚え書きである。

> At first Ella does not think about her [=Paul's wife]. Then she has to make a conscious effort not to think about her. … the shadow of the third grows again, and it becomes impossible for Ella not to think. She thinks a great deal about the invisible woman to whom Paul returns … (*GN*, p.179)

"shadow" とはユング派の解釈によれば、「個人の意識によって生きられなかった反面、その個人が認容しがたいとしている心的内容」[9] である。Annaは *The Shadow of the Third* と題しEllaの「影」を追っていくが、やがて、Annaの錯綜気味の心を表すかのように、AnnaとEllaは重なり、更には観察者であり分析家である側のAnnaは消滅してしまう。EllaがAnnaの意識から独立して、勝手に動き出すのである。Annaには、Ellaがどう動くのか、何を次にするのかわからない(*GN*, p.393) という奇妙な、夢中の現象が生じる。もはやAnnaがEllaの「影」を追うという本来の意図とは逆に、むしろEllaがAnnaの「影」の象徴として、Annaの抑圧された自己をあばいていくことになる。コミュニストとして、或は男に頼らず生きていく颯爽とした自由人としての姿とは、全く別のAnna の一面が、Ellaを通して明らかにされる。つまり、このように相反する幾つもの面を、人間は内蔵している生き物なのだということを、Lessingは訴えているのだ。

この小説は1957年に40才であるAnnaとその親友Mollyが、Molly のフラットで1年ぶりの再会を楽しむシーンで始まるが、きわめて奇妙な構成をもっている。 Walter Allenが "clumsy, complicated rather than complex"[10] と評したその構成について Lessingは序文の中で、 *The Golden Notebook*を書くに至った動機を語ると共に、何故それほど複雑な構成が必要だったかについても述べている。"some sort of an artist, but with a 'block'"[11] を主人公にして、精神の崩壊をテーマにした小説を書きたかったと彼女は言う。"breakdown" をテーマとした小説は古来多いが彼女の狙いは "breakdown" について書くのではなく、"breakdown" そのものを描き出すことにあった。以下は彼女自身の言葉である。

> this is where, apart from the odd short story, I first wrote about it. Here it is rougher, more close to experience, before experience has shaped itself into thought and pattern — more valuable perhaps because it is rawer material.[12]

体験を、それが意識化される以前に、より生々しい形で描く、そのために考え出されたのが、*Free Women*と題する普通の構造をもった物語を5部に分け、各部の末尾に*Free Women*の主人公Anna Wulfが書いた4種類のノートを付随させ、更に最終的にそれら4種のノートが *The Golden Notebook* として1つに統括されるという、実に奇妙で複雑きわまりないスタイルであった。

もうひとつ、時間も複雑さを構成する重要な要素である。*Free Women*は1957年を基点に展開されるが、4種のノートはそれぞれBlack—1951年、Red—1950年、Yellow—不明、Blue—

1950年を始点とした、過去に書かれた記録である。その4つのノートを1957年現在のAnna が読み返す場面で*Free Women1* は終わり、続いて4種のノートが順次披露される。がその際に1957年これらを読み返している現在のAnna が随所に顔を出す。殊に黄色ノートでは、Ellaを主人公とした小説 *The Shadow of the Third*の原稿という設定もあって、夥しく現在のAnna が姿を見せ、過去に書かれた記録に手を入れる。このように錯綜した時間は、*J.* L. Careyの指摘する[13]数々の記述事実の矛盾と共に、読者を混乱に陥れる。読者は自分が理解したと思ったことが、もしかしたら錯覚だったのではないかと何度も不安にかられ、後もどりさせられる。一体、何が真実なのか。*The Golden Notebook*に現れるあらゆる複雑さは、Carey が言うように "serves to blur reality, to prevent the reader from identifying, the real 'truth' of a situation or of a time"[14] という任務を担っているようである。Lessingの語るところ[15]によれば、彼女が*The Golden Notebook*に於て意図したことは、限りなく細分化されてゆく社会にあって、己れの集団の中での存在感を喪失してしまった個人が、精神崩壊の後に再び統一的自己を回復する過程を逐一描出することであり、"we must not divide things off, must not compartmentalize" というのが、そのエッセンスであるとのことだ。このような彼女の意図は、読者を混乱の中に陥れ、現実の〈混沌さ〉をいやおうなしに認識せざるを得なくさせる、上述の〈複雑さ〉によって、充分に達成されているといってよいであろう。

Anthony Burgessは、一個の芸術作品として眺めた場合、Lessingの訴えは説得性に欠け感動を惹き起こさないという趣旨のことを述べ[17]、同じ観点からWalter Allenも、失敗作とみなしている。しかし、Allenが一方で認めているように、[18]Annaという自意識の強い女性の描き方は実に赤裸々で、誠実味にあふれており、4種類のノートという手段のユニーク性が効を奏して、彼女の心の動きは手にとるように読者に伝わる。Annaが陥る言葉に対する不信感、現実に対する喪失感、自己の「影」への凝視。いずれも先述の〈混沌〉の中で、感動を呼ぶことはないかもしれぬが、読者に共感を覚えさせずにはおかないリアリティにみちている。

むすび

James Gindinは、50年代に発表されたLessingの小説を評して、彼女は歴史的な事実にとらわれるあまりに、登場人物の設定を類型化しすぎる傾向があり、ために彼女の小説は、人間に対する複合的な深い認識を欠き、平板でつまらないものになってしまっていると述べている。[19] "Her politics are one-sided, her characters are limited in conception, and her world revolves in a simple pattern."[20] というのが、彼の印象である。しかし今までみてきたように*The Golden Notebook*はこうした不満・批判を一気に解消するものであった。同書の有するあらゆる複雑さは即ち、Annaという一個の人間を象徴するものである。錯綜した時間と、複雑な構成とを設定することにより、Lessing は混乱と秩序を巧みに同居させ、それによって、矛盾だらけの人間の生の姿を、一層効果的に描き出しているのである。

また、Maryも決して平板な人間ではない。*The Grass is Singing* については、その成功の一因を、20世紀に入ってからの実験小説の氾濫に辟易し、伝統的な手法による小説に飢えていた読者の前に、タイミングよく登場したためであるとする見方[21]がある。第2章から第10章まで一貫してMaryに視点を置いた描き方は、読者を一気にMaryの狂気の世界に引きずり込む力強さを生み出し、読者を魅了するもととなっているが、一方で、MaryをGindinの言う平板な人間にしてしまう危険性をも秘めるものである。だがLessing は第1章と第11章のみを、他の人間の視点から描いており、これがMaryにふくらみをもたせる結果となっている。殊に11章に於ける視点の転換は、読者にとって衝撃的ともいえる効果を生み出している。Charlie及びTony という正常人の眼を通して、初めて読者は、狂った

Mary、なす術もなくおどおどしているDick、ただの黒人の召し使いにすぎないMosesを、謂わば客観的に眺めさせられることになる。そして今までMaryというフィルターを通して見てきたために、我々の前に仁王のように脅威的に立ちはだかっていたMosesが、実はMary の崩壊した精神の生み出した虚像にすぎなかったことを発見する。それと同時に、この小説は結局、カラー・バーよりもセックス・バーよりも、むしろ疎外された或は社会から孤絶した女の悲劇を扱ったものだということに思い至るのである。

以上に見てきたように、*The Grass is Singing*で、社会から全く遊離し、己れの中に閉じこもってしまった個人の破滅を描いたLessingは、やがて、*The Golden Notebook*に於て、集団と個のかかわりを全的に描いた後、個のかかわりの対象を、より深く遠く広大なものへと向け始めたのである。

（英文学科）

〔注〕

1）Mona Knapp, *Doris Lessing* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., Inc., 1984), p.180.

2）Mona Knapp, 上記、及び*Doris Lessing*, Compiled by Dee Seligman (U. S. A.: Greenwood Press, 1981) を参照。

3）M. V. Libby, "Sex and the New Woman in *The Golden Notebook*." *Iowa Review*, 5 (Fall 1974), p.106.

4）Doris Lessing, *The Grass is Singing* (Granada Publishing Ltd., 1982)。以下、同書からの引用はすべて*GS*と略す。

5）Doris Lessing, *The Golden Notebook* (McGraw-Hill Book Company, Inc., 1965)。以下、同書からの引用はすべて*GN*と略す。

6）Doris Lessing, "Preface to *The Golden Notebook*." *The Novel Today*, ed. by Malcom Bradbury (Manchester University Press. 1977), p.169.

7）Mona Knapp, *op. cit.*, p.180.

8）M. V. Libby, *op. cit.*, pp.106－107.

9）河合隼雄著『ユング心理学入門』p.101（培風館）

10）Walter Allen, *Tradition and Dream* (London: Phoenix House, 1964), p.277.

11 Doris Lessing, "Preface to *The Golden Notebook*.", *op. cit.*, p.174.

12）*ibid.*, p.170.

13）J. L. Carey, "Art and Reality in *The Golden Notebook*." *Contemporary Literature*, 14 (Autumn 1973), p.439.

14）*ibid.*, p.441.

15）Doris Lessing, "Preface to *The Golden Notebook*.", *op. cit.*, 参照。

16）*ibid.*, p.172.

17）*The Novel Today*, *op. cit.*, p.100.

18）Walter Allen, *loc. cit.*

19）James Gindin, *Postwar British Fiction* (University of California Press, 1963), pp.65－86.

20）*ibid.*, p.86.

21）Mona Knapp, *op. cit.*, p.19.